

第9回駿河海岸保全検討委員会 議事要旨

日 時 平成31年3月15日(金) 15:40～17:10
場 所 静岡県男女共同参画センター「あざれあ」 5階 第3会議室
出席者 東京大学大学院 佐藤教授
名古屋大学大学院 水谷教授
静岡大学 原田准教授
国土技術政策総合研究所 加藤海岸研究室長
静岡県交通基盤部 太田河川砂防局長
中部地方整備局河川部 尾藤河川調査官（代理：可児河川情報管理官）
中部地方整備局静岡河川事務所 稲葉事務所長

<議事>

○T.P.8.2m 区間における構造検討結果について

- ・最小厚さ 50 cmが確保されていれば問題ないという結果といえる。今回の実験は、表法から浸透して擁壁が浸透した水の水圧により内側から押されることを考慮していない実験である。このような浸透した水の影響もあるので、水抜きはエンドシル側に抜くのがよいと思われる。
- ・水路の排水先は現地盤面よりも下に抜くこととなり、民地と近接している場合には、排水方法の検討が必要と考える。
- ・ジオテキブロックを用いた構造を使う場合には、基礎コンクリートとジオテキブロックの連結等に課題がある。鉄道等の盛土などの実施事例等を参考に採用の可否を検討するとよい。
- ・水抜きは、陸側の盛土を実施する場合、排水が良すぎるとそこから土砂も抜けて、盛土内に空洞ができるおそれがある。そのため、地盤の排水性等を考え、吸出しに注意した方がよい。
- ・上部の法肩についても通常の粘り強い構造と同じ考えで、一体的な構造とした方がよい。
- ・断面が変わる箇所の構造は、隔壁で縁を切った方がよい。
- ・用地の制約がある区間については、排水・端部、地元の方の意向を協議のうえ、擁壁構造を採用するという結論とします。

○長期将来予測結果とモニタリング状況について

- ・P.11の整理のとおり、14万 m³の中に0.05～0.1 mmが寄与していることとなっている。川から出てきた土砂の一部は、沖に流されていると思われるため、今回の結果は少し甘い条件での結果となっている可能性もあると考えられる。これぐらいの結果が最小値と考えるべきである。そういった観点からも、モニタリングが重要である。
- ・経年の流砂量と汀線位置の関係については、その年の波の条件の違いにも留意する必要がある。
- ・P.10を見ると、榛原工区や県区間では、堆積傾向の計算結果となっているが、P.15では後退傾

向となっている。この場所は、天竜川からの影響もあり、よくモニタリングしておく必要がある。

- ・天竜川流砂系の検討においても、御前崎を回り込む量や地形変化等のモニタリング及びシミュレーションを行っているので、それらと整合する結果となっているか、今後も確認する。

○モニタリング計画（案）について

（モニタリングに関する研究事例の紹介）

- ・モニタリングでドローン等を使用する場合、GCPをうまく配置しておくことが重要である。堤防や消波堤等にうまく配置すると有効かもしれない。
- ・ドローンを低く飛ばして、解像度を上げると、粒径が細かいとわからないが、表面の粒度分布も把握できる。
- ・いわゆる定期的なモニタリングだけでなく、機動的な研究開発段階のモニタリング方法も組み合わせ、試行的に進めていただきたい。

○今後の予定

- ・次回以降、モニタリング結果等の報告を含めて、引き続き、年1回程度の検討会開催を予定する。